

ライプニッツのモナド論について

上 憲治

Monad Theory of Leibnitz

Kenji KAMI

序

モナドとは何か

ライプニッツのモナド論は自然的なものとも数学的なものとも考えられる。あらゆる場面において、その中の一つ一つの単位を示しているのである。これらの単位は窓を持たないということによって、1つの絶対的なもののように受け取られる。すなわち何者によっても可変性を加えられないという印象を与えるのである。いわば実体観念の印象を与えるのである。

本稿では、モナドを人間学的に捉えてみる。すなわちモナドという、絶対的・独立的・実体的な印象を与える単位は私達各個人のことであるということである。個人間には窓がないということは、個人と社会や国家などとの関係について、こうしたモナド的な1つの原理を提示していることになるのである。

予定調和世界の各レベルで単子が存在する

予定調和はそうした単子同士が、単子以外の、外の影響によって1つのまとまった集合を形成することを意味する。例えば、細胞や分子・原子レベルのそれぞれの世界には単位となるものがある。原子世界には幾つかの原子が、鉄やニッケルやマンガンのように限定的にある。これらの原子の組み合わせによって分子レベルの単子が形成される。形成内容の各原子間には窓はない。それが1つの分子の存在を形成するのは各原子以外の外からの力によって所定の構造を形成するのである。

同様に個人が社会や国家を形成するのは予定調和の原理によっている。それによれば個人という単子のまともりは家族という単位を形成する。各個人には、家族であっても窓はなく、予定調和の原理によって家族を形成すると、いえる。また家族は個人レベルを超え

た家族レベルでの単子として形成されたものである。その各家族間には窓はない。こうして様々な人間社会の構造が形成されるが、それらが機能しているのは予定調和によっているのである。

各レベル間の世界の繋がりはどうなっているのか

原子レベルと分子レベルの各世界間はどう関わっているのだろうか。同様に分子レベルと動植物の世界はどう関わっているのだろうか。同様に個人と社会・国家とはどう関わっているのだろうか。

基本的に近代個人主義はこの関わりの問題を適切に処理しなければならない課題を抱えているのである。しかし「モナドには窓がない」という発想は、個人間のコミュニケーションによって社会や国家の問題を解決できるという観点には立っていない。すなわち「モナドには窓がない」のであるから、個人の意志が他の個人に働いたりあるいは他から意志が作用したりすることはない、からである。

縦の予定調和と横の予定調和

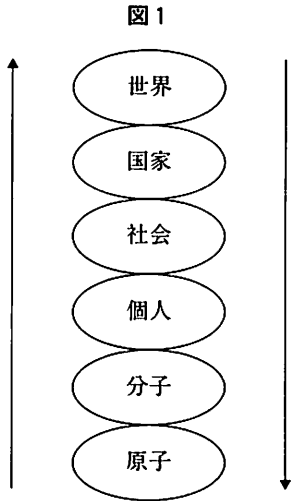
予定調和は各レベルで閉じられた世界での予定調和であるか、異世界間のつながりをも含めた予定調和であろうか。両方を含めるものあるとしても、前者と後者の予定調和は違ったものであるだろう。しかしここに現れるのは弁証法への流れである。ヘーゲル的であってもマルクス的であっても、つまり下降的弁証法であっても上昇的弁証法であっても、異質な世界間を流れる流れ（縦の流れ）と同レベルの閉じられた世界内を支配する予定調和があるということである。この2つの予定調和は違ったものであるだろう。

縦と横の関係はどうなっているのか

横の予定調和と縦の予定調和について考察してみる。

これらは無関係にはあり得ない。

図1は各レベル世界のつながりをイメージしたものである。



各レベル世界内での予定調和は閉じられている。異世界への移行は、各レベル世界は点的な接合であるから、異世界へのワープ現象によって関わっている。

また同世界内での予定調和は縦の法則によって支配されている。縦の方向には上昇と下降の2方向の法則があり、それらに支配されている。

原子が幾つか集まって分子ができていくといわれるライプニッツのモノダ論に従えば、原子の寄り集まりは原子間の関わりによって生まれるものではない。それを可能にするのは予定調和の発想である。現代の物理化学はこの辺の事情を実証的に詳細に解明しているが、私はそうした予定調和をワープ現象と考えている。予定調和は神の働きによるものと考えられているが、現象的に捉えると異次元へワープしているものと考えられるということである。

ワープ (warp) は「ねじる」とか「曲がる」という意味だが、人気アニメ「宇宙戦艦大和」のワープ航法という表現にヒントを得ている。ワープ航法とは宇宙戦艦大和が住居29万6千光年の旅を二年で成し遂げるために行なう航法で、超光速飛行のことである。時間の点から点へと移ることである。ワープでは中間世界は飛び越えられ、日常的にはジャンプと同じである。原子から分子への移行は両者の中間世界をジャンプしてしまう現象である。それをワープと呼んだものである。こうした異次元への瞬間的移動をイメージしている。

1. モナドとしての個人観：認識論的意味と存在論的意味

「モノダには窓がない」ということを個人に当てはめると、個人観には直接的な交流がないことを意味する。私達が日常的に理解しあっていることは、私達個人間に窓があるからというわけではない。私達はお互いに理解しあっていないのかもしれないし、理解しあっているととしても、お互いの間に窓があるからというわけではない。別の理由によってそうなっているということの意味する。

こうした「モノダには窓がない」と言う意味は、二通りに考えられる。1つは認識論的な意味において、もう1つは存在論的な意味においてである。認識論の意味においては主観主義を主張していることになるであろうし、存在論的な意味においては、個人の絶対的存在性を意味することになる。

「モノダには窓がない」ということの認識論的意味合いは英国の主観主義と共通性が窺える。特にバークレイの、一切が主観以外の何ものでもないという絶対的主観主義に通じるものがある。しかし、私は、主観主義はそれが認識論であるということによってそのジレンマに陥っていると考える。認識論は、認識と言う行為が個人の主観の中でしか起こりえないという暗黙の前提によって、その産物の一切も主観以外の何者でもないという囲い込みに落ち込んでいる、と言えるのである。

認識と存在のスリップ関係

いわゆる認識と存在の問題は、相容れない概念がどのように並存できるかと言う問題である。私はここにはスリップ現象があると主張する。認識されたものはそれが認識によってもたらされたものであるからといって、いつまでもその所有権を主張することはできない。それは認識から生まれながらも同時に存在者として変異するのである。

こうした現象は宇宙の創造の現象である。細胞と血液やリンパ液との間に起きている現象は異世界への受け渡しであるし、言葉によって気持ちが変わるのは、言葉という物理現象が精神現象に変異する現象である。

英国経験論の主観主義の特徴は、その潔癖主義によって、認識が主観世界でしか生成しないという原理によって、その生成物も主観以外のものでないという因果論や論理に忠実であるというところにある。特にバークレイ的な絶対主観主義の発想では、主観の中には主観以外の何者も存在しないのであって、そこに生じている一切は主観からやってきているものと考えられ

ている。外界のものが主観に働きかけて認識が発生するという素朴实在論によっては全く疑問視されていない主観の外の实在世界はその根拠を失っているのである。認識が、個人の認識の中で起こる以上、個人の現象である以外の何ものでもないのである。

こうした考え方が近代から現代の日本ヒューマニズムに与えている影響は深刻である。私達の時代の「自分なりに……」とか「私の意見では……」という個人主義の態度は、個人の絶対化を強調し、一種の逆ファシズムを生んでいるといえる。逆ファシズムとは完全個人主義的の社会である。ファシズムが異論を認めないという全体主義であるなら、逆ファシズムは同意を一切拒否するという社会である。(M. ピカート「騒音とアトム化の世界」 みすず書房)

カントに見る認識と存在の境界

カントは「物自体」の認識を不可能としたが、この発想は認識の領域と存在の領域との住み分けをしなかったことに由来すると思われる。カントのこの命題の意味は2通りに解釈できる。1つは、「物自体というものが存在するがそれを知ることはできない」という意味である。もう1つは、「物自体は認識対象にはならないという意味である」

最初の意味は、認識の対象ではあるが、何らかの理由で認識の手の中には捕らえられないということである。例えば神を知ることはできないのは、神が人の認識には捉えられないからである、というように。2番目はいかなるものも認識の手の中に陥った時は、それは認識以外の何ものでもなく、いかに純粋に正確に認識の手中に納めても、それは認識以外の何ものでもない。それが物自体であるということではなく、物自体の認識的現象でしかない。その意味では我々は世界や物自体を認識しているといっても、その認識されたものは認識の領域以外の何ものでもない。我々が捉えたと考えている世界は我々の認識の手中に納めたものとは全く違ったものでしかない。その意味では世界は我々が思っているものとは全く異なったものであるということが出来る。というのは我々人間の認識領域は五感感覚に限定されるし、その感覚領域も非常に狭く限定されている領域でしかない。

感覚が無限にその領域を持っているというような状況では私達はどうなるだろうか。ここではむしろ感覚能力が限定的であるということは、我々の選択であり、我々の創造性であるといえる。

しかしそれでも、認識の手中にあるものは認識以外の何ものでもなく、世界や物自体ではない。世界は認

識の手がそこから汲み取る源ではあっても、認識が汲み取ったものとは似ても似つかぬものである。なぜなら世界が認識であることは永遠にありえないからである。

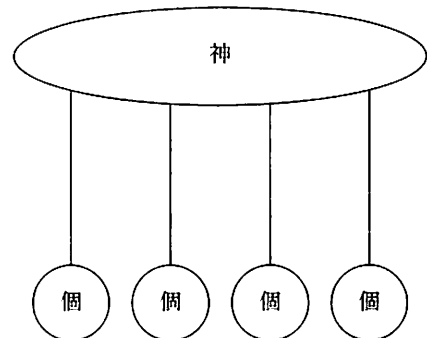
ここには認識という行為が一種の加工作業であるという思い込みが前提になっている。例えば我々は言葉によって認識を成立させるという手段があるが、言葉という認識によって捉えられた時にはそこにあるのは言葉であって、純粋には言葉の加工品でしかなく、純粋には捉えようとしたものではなく、違ったものである。

また、捉えようとする対象も、常に変化するものであるから、捉えた瞬間には既に他の位置に移動したり、物自体が変化していたりで、既にそこには認識対象と同じものは存在しないという意味で、純粋には捉えることはできないということもいえる。

予定調和説とスリップ現象

私達が互いにコミュニケーションをとるのは、各個人が神との縦の関係にあることによっている。個人はただ神と関係しているだけである。神との交流において他者認識が発生する。もし個人が神との関係を失うなら私達には他者との関係は失われる。この意味では他者とは神の内容に他ならない。私達は他者を知るといふより、神を知ることになる。この発想は、印度的発想に共通する。つまり梵我一如の世界は、個人と神との同一性を示唆しているといわれる。

図2



認識論的には個人において認識野に捉えられたものはその個人の認識以外のものではないのだからそこに現れた他者認識もまたその個人のもの以外のものではない。最もこの認識現象は個人に所属はしているからといって個人のものとは限らないという発想も考えられる。この発想は別に考察したい。

個人の認識野に捉えられたものは神からきているものであり、これにおいて個人は神と共通しているといえる。このように各個人はそれぞれ神から来ている他者認識をもつ。こうして他者の認識が神によって成立するのである。

この認識の内容が各個人によってバラバラでないのは各個人が神との関係によってその認識を得ているからに他ならない。いわば神による整合性があるのである。すなわちそれは1つの調和である。私達がバラバラでなく、一つの整合性の行動下にあることは実は大変不可思議なことである。バベルの塔の言語混乱によって人類はお互いに理解し合えないようになったというが、実はお互いに理解し合えることのほうが不思議なことなのである。

予定調和の現象面としてのスリップ現象

私達が理解し合えるのは共通の感覚や言語によると私達は考える。しかしここではそうした意味で言っているのではない。私達が感覚や言語的な理解を可能とする根拠を問うているのである。感覚は感覚だけでは我々の認識野には上ってこない。感覚だけでは身体の物理的現象に止まっているからである。例えば「痛み」についてみると、皮膚上で針が刺さった現象はまだ痛み感覚ではない。これが言語的に「痛い」という意味と結びついた時に「痛み」が特定されるのである。「針が刺さったという現象」と「痛み」という感覚とはパラレルである。パラレルなものが結びつく原理は実はよく分からない。しかしこうした現象は日常的に私達に起こっていることである。

この説明に類似する現象は心理学における転移やアナロジーといわれる現象である。

私はスリップ現象であると考えている。全くパラレルな世界が同一な世界のもののように統合されて、密接不利なものとなるのである。これと似た学説はヘーゲルの弁証法にも見られる。ここには予定調和の力が作用していると考えることができる。こうして私達は物理的な現象面から認識的精神活動に移行し、また存在（エゴの確立）に至り、やがて永遠性へと飛躍することができるのである。しかし必ずしもその方向性は上昇的とは限らない。

スリップ現象の両面性

スリップ現象の道徳的な展開において見られるのは、感情への転化現象である。投影同一化といわれるこの現象は転移現象として説明されるが、まさかAの感情がそのままBの心に移るわけではない。Bにおいては

全く無関係であるにもかかわらず、AとBは感情を共有するのである。このメカニズムはBの何らかの類似の出来事が同様な感情をもたらしているということである。このときのBにおける出来事と感情との関係にスリップ現象が見られるのである。このスリップ現象はさらに次のスリップ現象をもたらすことがある。感情は時には行動を引き起こすといわれている。感情と行動との関係で一般的なのはストレス解消のための行動である。私達は「出来事」→「感情」→「行動」の連鎖は必然的であると思っている。しかしそこにある矢印→は必然的ではなく、スリップ的である。

問題はこうしたスリップ現象がどうして成立するのかということである。それはこれらの連鎖の各項（要素）が必然的に結びついているという盲目的な思い込みに起因している。心理学的にはここには遺伝的な継承があるといわれている。虐待を受けた親は自分の子にも虐待を及ぼすというデータがそれである。これは人類の文化の継承である。道徳的にはこれらの連鎖を断ち切ることができれば本質的な意味で問題を解決できるのである。そこでこのスリップ現象を覚知し、それぞれが元来無関係なものであるということを実感することでこの連鎖を断ち切ることができるのである。道徳的にはここに問題解決の糸口が見えるのである。ここに述べた例でのスリップ現象は負のスリップ現象といえるであろう。あるいは下降のスリップ現象といえる。

以上によってライブニッツのモノド論の絶対主観的で唯我独尊的な閉鎖的自我は予定調和によってその孤独性を逃れようとしていることが窺える。私はその孤立性の解除は神の予定調和の計画によるというのではなく、異次元世界に通うスリップ現象によると考える。しかしこのスリップ現象は全宇宙の生命現象に常に働いている不可思議な作用である。それを神の働きということもできる。

しかしライブニッツの单子論の主張から帰結するのは单子という個人を強固に主張するところにある。この視点から单子論を見てみよう。

2. ライブニッツ单子論に見る近代的自我観の本質

单子論の本質は人間個人が社会や国家や教会に支配されるというのではなく、神に直接、また神とのみ通じているという、神聖にして犯されざる存在であるということにある。人が社会や国家や特に教会と関わるのは神を経由してのみ可能であるし、本当のところはそうして個人間のコミュニケーションが成り立って

いるということである。従ってこの個人の本質性は何者も犯してはならないのである。社会や国家や教会の及ぼす権力は本当の意味で個人を導くことはできないし、また支配することもできない。ただ暴力が物理的に人間を破壊するだけである。永遠のいのちをテーマとする時、暴力による身体的、心理的破壊は何ら人間本質の破壊とはならない。そしてここで問題となっているのは永遠のいのちとしての個人のありようであるから、決して見当違いな話ではないのである。このことに関して、自ら十字架にかけられながらもその迫害者のために祈ったイエス＝キリストを私は思う。

ここには近代の新しい個人観が主張されている。この個人は神とのみパイプがつながっている。それはこれまで虐げられてきた個人を解放するためのものであった。

モナドと神とのつながりの分析

しかしここに幾つかの問題がある。①「本当に個人は神とのパイプを持っているのか」あるいは②「そのパイプはどのようにしたら通うのか」また③「そのパイプの通う先の神はどんな神なのか」

まず①について、私達は素朴に疑問に思う。神とのパイプがあるとして、なぜそれ以外の社会などの影響がそれ以上に支配力が大きいのかということである。そもそも「モナドには窓がない」のであるから、神以外の力が作用することを理解できないのである。

神とのパイプとその他からの影響との力関係が発生するのはどうしてであろうか。これに対して神とのパイプも他との関係も同等な力関係にあるということがいえるであろう。神とのパイプの力を強くできるのは神への信仰的力によるのかもしれない。神への信仰が他の力を排除できるということが考えられる。

では、神とのパイプとその他の影響との本質的な違いはなんであろうか。ア、神とのパイプは個人の核に直結するものであるだろう。その人自身の存在根拠であるからである。イ、一方他からの影響は身体的あるいは心理学的の媒介によるものであろう。ここで他からの影響という点について2点考えられる。まずi モナドが神を経由して認識する他者であり、もう一点は、ii ここでいう身体的・心理的影響としての他者である。iの意味では神とのパイプを経由するものであるから個人の核であり存在根拠であるものに関わっているからアの場合と同じである。従ってイの意味での他の影響と言うものは、個人の本質的なものではなく、非実体的なものでしかない。

強固な自我の主張

ライブニッツの時代においてはこうした非実体的な、経験的で永遠性のないものによって自己を位置づけるということは歓迎されなかった。自己は永遠性を持つことが当然の前提になっている。ここにある1つの難点はやはり自己を絶対視しようというエゴ観である。ライブニッツのモナド論の深層に流れているのは永遠のエゴの追求である。

モナドは普遍的・永遠的にゆるぎなく存在するものである。そのエゴは神とのみパイプを持ち、他の影響を一切排除する強固な存在である。そのエゴは絶対的で強力な近代的ヒューマニズムのエネルギーとなっているのである。

これに対して我々日本人はこうした強固な自我観を持ち合わせていない。必然的に自我が拠って立つ所や拠り方なども別様のものになる。概して西洋の思想の根底にはこうした強固な自我観がある。あらゆるものを、アインシュタインの相対性理論的に捻じ曲げても、自分の世界に閉じ込めようとする強い引力を持っているのである。それに対して我々日本人の自我観には一種のほかなさがある。平家物語的な無常観が我々の自我観の根底にある。我々の自我は永遠普遍であろうとしない。我々の自我はやがて死と共に消えるものである。かりそめの存在でしかない。（「日本の自然主義」）

頑強な自我から矛盾的な自我まで

②の問題。個人と神とのパイプはどのように通っているのか。①で問題にしたようにこのパイプは個人と神との間にかっちり結ばれているのか。個人は深く強い内省によって神とのパイプをたく強くできるのかもしれない。ここで問題になるのは、i このパイプによって神の意識が個人にやってくるのか、ii 個人が神の意識に届いていくのかということである。個人が個人として存在する限りは神が降下してくると考えられる。個人が自我を虚しくするなら神の世界に個人は解消してしまうであろう。分析的にはこの2点が考えられるが、現実的にはどちらが可能的なのであろうか。ここには神と人との関係のありようのモデルが問題となるであろう。私としては、i は神が個人を支配することであり、ii は個人が神に溶解することであるように思われる。しかし個人が支配されることもなく、神に溶解するということでもなく、自己が明白に存在しながら神とひとつになる道も考えられる。これをiiiとしよう。この道は分析的というより矛盾的というほうが良いだろう。

③の問題。我々はここで神について問題にしよう。

ライブニッツにおいては西洋キリスト教が原点である。この神はヤーベの神であり、キリストの神である。この神観はライブニッツの個人観をも左右していることは言える。そこには頑固なエゴ観がある。単純な違いであるが、この違いは無意識のうちに我々との世界観や人間観や人生観において相容れない対立を引き起こしているのである。一方我々にとっては、神とは八万神であり、自然神である。エゴは強固に位置づけられるモノドではなく、むしろ自然の神々と共にあり、その一部に化するものである。

近代的自我観に基づく西洋流の行き方や自我観は我々日本人にかなり無理なものだったようである。人間の生き方はよく理解できない著書や思想を苦勞して理解しなければ達成できないようなものであつては困る。無理なく日々の生活の中で自然体得していくところに極意があるものと思われる。